View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

P-013

当院における肝膿瘍症例の臨床的検討

八戸赤十字病院　消化器内科
○高宮（たかみや）　秀式（ひでのり）、塚原　智典、大泉　智史、鈴木　歩、牛尾　晶、久多良徳彦

【背景・目的】肝膿瘍は致死的な転機をたどることがあり早期発見が重要であるが、その特異的な所見に乏しく診断困難なことが多い。今回、当院で過去5年間に診療した肝膿瘍症例を臨床的に検討し、その特徴、早期発見への道筋や治療方針を明らかにする。
【対象】2007年4月から2012年3月までに当院を受診し、肝膿瘍と診断された19症例(男性：12名、女性：7名、平均年齢：65.9歳)について検討を行った。
【結果】受診契機は発熱が89.5％と最も多く、診断契機は造影CTが57.9％と最も多かった。基礎疾患は悪性腫瘍例が31.8％で、次いで糖尿病例26.3％、胆道炎21.1％の順であった。また基礎疾患を有さない例も認めた。初診時にDICを呈していた症例は42.1％であった。採血所見では白血球異常は84.2％、CRP上昇は全例にみられ、平均20.7mg/dlであった。また肝逸脱酵素、胆道系酵素上昇も多くの症例でみられ、正常範囲であった例は1例のみだった。治療はドレナージ例が10例(1例は経乳頭)、動注例が3例であり、89.5%が治癒し死亡例はDICを併発していた。起因菌は10例に検出できたがKl.pneumoniaeが70％であった。
【考察・結語】肝膿瘍は不明熱として診断される事が多く、自験例においても9割が発熱を主訴に受診している。今回の検討から多くの症例がcompromised hostで、採血で炎症反応上昇、肝逸脱酵素や胆道系酵素上昇を伴っていた。診断へのプロセスとしてまず採血を行い炎症反応、肝機能異常を確認し、画像検査(可能であれば造影CT)を追加することで肝膿瘍を診断し得ると考える。治療は膿瘍ドレナージが有効であるが、非液状化例やDIC併発例では肝動脈内抗生剤注入療法も有効な治療法である。肝膿瘍はcompromised hostに発症し易く、発症早期よりDICを併発し易い疾患であるが、適切な診断と治療を行う事でその多くは救命できるものと思われた。

P-014

肝癌に対する肝動脈化学塞栓術におけるミリプラチンとシスプラチンの比較検討

庄原赤十字病院　内科
○大屋（おおや）　一輝（かずき）、鎌田　耕治、杉本　智裕、大沢　光毅、益田　和彦、盛生　慶、谷口　真理、盛生玲央奈、桑原　隆泰、中島浩一郎

【はじめに】ミリプラチンは高い腫瘍滞留性と徐放性を示し,臨床的有効性や副作用の軽減が期待されている.
【目的】HCCに対するミリプラチンを用いた肝動脈化学塞栓術(TACE)の短期成績について,シスプラチン使用例と比較検討を行った.
【対象と方法】対象は2010年4月から2011年6月までミリプラチンを用いたHCC45例65回(Mi群) と 2008年4月から2010年3月までにシスプラチンを用いたHCC52例89回(CDDP群).各治療群の患者背景：Mi群は平均年齢 74歳　(57-92),男女比 34:11,B：C：NBNC=7:25:13例,肝障害度A:B:C=56:8:1,平均腫瘍径33.7mm (10-100),Stage I:II:III:IV=11:28:17:9例.CDDP群は平均年齢73歳(45-88),男女比36:16,B：C：NBNC=10:32:10例,肝障害度A:B=62:27,平均腫瘍径36.6mm(10-120),Stage I:II:III:IV=10:26:41:12例.2群間の患者背景には有意差なし.治療効果判定はTACE後7日前後のCTで行い,肝癌治療効果判定基準(2009年改訂版)に準じた.また有害事象の頻度について検討した.
【結果】Miの平均投与量は63mg (20-140),LPD平均投与量は3.1ml (1-7)で,CDDPの平均投与量は33.7 mg (10-55), LPD平均投与量は3.4 ml (1-5.5)であり,LPD投与量に有意差を認めなかった.治療効果度はMi群; TE4:7例(11%),TE3:33例(51%),TE2:25例(38%)で,CDDP群; TE4:4例(5%),TE3:62例(69%),TE2:23例(26%)であり,有意差を認めなかった.有害事象は,嘔吐,発熱,腹痛などの副作用や肝障害,白血球減少などの頻度に有意差を認めなかった.しかし,血小板減少はMi群22%(14/65),CDDP群40%（36/89）,腎障害はMi群11% (7/65),CDDP群25%（22/89）で,CDDP群が有意に高頻度であった.
【結語】HCCに対するミリプラチンを用いたTACEはシスプラチン使用例に比し短期治療効果は同等,有害事象は低頻度であり,有効な治療法と考えられる.

P-015

妊娠により繰り返した肝障害の１例

那須赤十字病院　内科
○室井（むろい）　純子（じゅんこ）、佐藤　隆、古川　歩生、前田　一樹、葛西　貴広、町田　安孝、石川まゆ子、近江　史人、大原　千知、新井　由季、赤羽　正史、崎尾　浩由、矢野　秀樹、小林　洋行、池野　義彦、阿久津郁夫

【症例】38歳、女性。
【臨床経過】
＜第1子妊娠中の経過＞
200X年4月19日に千葉県在住中、産科的適応による帝王切開手術のために術前検査施行したところ、AST 288 IU/ｌ、ALT 419 IU/ｌ、ALP 725 IU/ｌ、γ-GTP 65 IU/ｌと肝機能障害をみとめた。このため同日緊急帝王切開手術が行われ無事出産。分娩後は肝機能障害は改善し、エコー所見は肝血管腫のみであった。
＜第2子妊娠中の経過＞
200X+2年栃木県に転居され、2人目を妊娠した。同年10月に出産予定で、第1子妊娠中のことがあり、妊娠初期から定期的に血液生化学検査を受けていた。比較的初期から肝機能障害が認められ、妊娠週数とともに増悪傾向にあった。10月25日に帝王切開手術予定であったため、術前検査したところAST 159 IU/ｌ、ALT 194 IU/ｌ、γ-GTP 42 IU/ｌであった。しかし手術前日の10月24日に胎児心拍なくなり、子宮内胎児死亡と診断され緊急帝切が行われた。死産児にはAiが行われたが異常なかった。
その後、当院に精査目的で紹介された。紹介時には自覚症状なく、軽度のAST、ALT異常あるも抗核抗体が弱陽性以外は、明らかな原因は特定できず。このため某医科大学消化器内科にて腹腔鏡下肝生検施行したが、最終病理結果でも明確な原因はわからず、現在も定期通院中である。
【結論】われわれは妊娠により繰り返した肝障害の1例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

P-016

Ｅ型肝炎の７例

伊勢赤十字病院　肝臓内科
○近藤（こんどう）　章人（あきひと）、濱岡　志麻、浦和　尚史、荒木　潤、小島　裕治

【はじめに】E型肝炎は従来、熱帯・亜熱帯地域の発展途上国における風土病としての流行性肝炎と考えられていた。そのため、先進諸国ではE型肝炎は輸入感染症の１つとして認識されていた。しかし先進諸国にもHEVが常在し、飼育ブタや野生のイノシシなどの動物を感染宿主としていることが明らかになった。わが国でも2001年以降、海外渡航によらないE型肝炎例が報告されるとともに、保存検体を用いた解析によって、それまで原因不明とされていた急性肝炎の一部にHEV感染が関係していたことが明らかになった。最近、抗体診断法やウイルス遺伝子検出法が確立されつつあり、E型肝炎と診断される症例も多くなってきている。今回、これまで殆ど感染者を認めなかったE型肝炎症例をここ2年間で7例経験したので、その患者背景、感染経路、臨床経過について検討した。
【症例】当院で2011年1月から2012年3月に急性肝炎で受診した患者のうち、7名がHEV-RNAが陽性であることが判明した。症例の平均年齢は63.8 (58～80)歳で、全員男性であった。初診時の検査値はAST254～4075(平均2197)IU/l、ALT919～5076(平均2131)IU/l、T-Bil0.8～11.4(平均4.6)mg/dl、PT69～104(平均88)％であった。またHEV-RNA量は8×10E2～3×10E5コピーであった。当院で確認した7例のうち、2例は遺伝子型を特定することができ、いずれもG3であった。また1例はシカの生肉を摂取する習慣があり、3例は発症前にブタの内臓を摂取していた。いずれの症例も安静および肝庇護薬の投与により症状・検査値ともに改善、特に重症化することもなく、1～3週間で退院となった。
【結語】我々は急性E型肝炎の７例を経験した。今回の症例では重症化することなく軽快したが、国内では死亡例も報告されている。病原体検査も普及してきておりさらに医師のE型肝炎の理解が深まれば早期の確定診断につながると考えられる。